

シングル・ファザーの子育て

皆さんは「シングル・ファザー」と聞いてどのような連想をしますか？

家事・育児に苦勞している父親の姿でしょうか。収入についてはどうでしょう。母子家庭よりも高収入で安定しているイメージがありますか？

この答えはイエスであつて、ノーでもありません。

現在、私は二人の子どものシングル・ファザーであり、NPO法人全国父子家庭支援連絡会を立ち上げ、ひとり親の支援活動をしています。このような私の立場、経験から父子家庭についてお話しします。

なぜシングル・ファザーに？

私のシングル・ファザー生活は、二〇〇四年一二月、妻との別居により始まりまし。別居当時の私の仕事

は、運送会社の営業所長でした。私が預かっていた営業所は、比較的小規模な営業所でしたので、事務所スタッフは私だけ。収支管理、人事・労務管理、車両管理、もちろん安全運行管理など、全ての管理業務をたつたひとりでこなしていました。

タンクローリーによる石油輸送が主な業務でしたので、灯油の需要が増える冬の季節が繁忙期でした。

二〇〇四年はちょうど新潟県中越地震が起きた年で、震災の影響で道路が寸断されている状態での輸送ルートの確保、被災地への輸送は、本当に苦勞したことを憶えています。

震災の傷跡も生々しいうちに冬が到来したため、朝まで営業所で仕事をすることも増え、自宅と営業所、どちらで暮らしているのかわからない状況が



片山 知行

全国父子家庭支援連絡会代表理事
ユナイテッド・プラス(株)代表取締役

【かたやま ともゆき】1971年、新潟県阿賀野市出身。銀行系コンピュータ運用管理関連、コンピュータ系SOHOにて独立。その後企業にて個人・法人営業及び営業管理、物流会社の運行管理者及び営業所長、行政書士事務所職員等のキャリア遍歴の末、社会支援活動による株式会社を設立。日本初の父子家庭支援の全国組織を設立。新潟市男女共同参画推進センター運営委員、阿賀野市児童福祉審議会委員を務めるほか、ひとり親、パパの子育て、ワークライフバランスなどをテーマに講演会も行っている。
全国父子家庭支援連絡会 www.zenfushiren.jp

続きました。そんな時に、妻が子ども達を置いて家を出たのです。

当時の私は、このようにワーカホリック(仕事中毒)で、運送業に転職してからというもの、わずかな時間を子ども達とのコミュニケーションにあてていたのですが、妻との会話やコミュニケーションを欠いていたのかもしれない。

仕事一辺倒で妻に愛想を尽かされるというシングル・ファザーは、私の周りに多くいます。

子育てをする上で大変だったこと

父子家庭に限らず、ひとり親のいちばんの悩みに、家事・育児と仕事に追われ、時間がいくらあつても足りないということがあります。なにしろ、ひ

とりで家計を担い、家事・育児をこなすのですから。私も例外ではなく、毎日時間に追われていました。

ただ、私の場合は、結婚当初より炊事・掃除・洗濯などの一連の家事はやっていましたので、ある程度の家事スキルは身につけていました。ですので、特に困ることはありませんでした。

妻が出て行った当時、子ども達も長男は小学三年生、長女は保育園の年



少で、既にひとりで身支度ができるようになっていましたので、育児に忙殺されるといってもありませんでした。

子育てに関しても、子どもが生まれた時から育児に積極的に参加していたこともあり、ほとんど困ることはありませんでした。

しかし、それでも当時は振り返ると本当に多忙を極めていたように思えます。端的に言えば、パパとママが混ざった姿ですが、朝は「早く支度しないと遅刻するだろー！」など、子ども達と毎日が戦争です。自分の身支度しつつ朝食を作り、子ども達を起こしつつ、頭の中では仕事の内容を整理し、子ども達の話聞きます。

こんな日常も、世の中のママ達はみんなやっている、などと自分に言い聞かせ頑張っていたことが思い出されま

す。また、上手に仕事の合間を見て、保護者参観や園・学校行事にも参加して、時にはPTAの役員も引き受けていましたので、目が回る毎日でした。夕方になれば「今日の夕飯何作るう」とソワソワして、大きな声では言えませんが、勤務中に夕食の買い物をしていたこともありました。本当に時間が足りなかったのです。

私の場合、幸いにも同じ市内に私の実家がありましたので、あまりにも勤

務が遅くなる場合は、実家の協力を得て毎日を乗り切っていました。

しかしそれでも、残業続きの仕事と家事・子育てとの両立はできず、会社の役員に辞職を申し出るものの、なかなか辞めさせては頂けず、退職するまでに二年の月日を要しました。

結局、体を壊し、心身症、不眠症、鬱病になり、仕事を辞めざるを得なくなり、というよりは、退職させて頂くことができました。

我が家の子育て

現在の我が家の子ども達ですが、息子は中学三年生、娘は小学四年生になりました。息子は少しヤンチャな時期もありましたが、基本的に素直に育っています。

子ども達とは基本的に何でも話します。僕の仕事や支援活動のこと、政治の話から時事ニュースはもちろん、学校のことも話します。ですので、僕は子ども達の考えていることのある程度や、子どもの友達の欲しいモノまで知っています。

息子は現在思春期、いわゆる年頃ですので、しっかり性教育も行います。「女の子を守るのは男の役目だぞ。だから、その時が来たら、ちゃんと Condom をつけるんだぞ。これ、男の役目な」などと、こんなことも話しま

す。こんな話をすると、さすがの息子も少し恥ずかしそうですが、しっかりと考えてくれているようです。

学生の本業は勉強ですが、私は子ども達に勉強をしない、などとは言いません。その代わり、なぜ勉強をしなければいけないのか、勉強をして知識を得て、テストの点数が良くなったら将来どうなるのか、など、子ども達と会話を重ねます。

娘も小学四年生になり、少しずつ大人になってきました。我が家には母親は居ませんので、生理や下着などの話も私があります。初潮などの話をしっかりととして、スーパーマーケットでは、娘と一緒に生理用品売り場に行き、「こんなにはっぱい種類があるんだな、選べないな、生理が来た時、どれ使えばいいか、友達に聞いた方がいいな」など、オープンに話します。

ひとり親に限らず、このように、子ども達と何でも話し合い、言いにくいことも言える関係性を築くことは、今日明日できることではありません。

これは、子ども達が小さな頃から子どもをひとりの人権者として接し、何でも話し合い、大切なことを伝え、愛を持って接し続けたことによるものなのです。ですので、仕事仕事で子どもと接していない父親が、年頃になった子どもに対し、突然出てきて進路の話

や将来の話、世の中の話をしたところで、子ども達は話を聞いてくれないでしょう。

私の子育て、子ども達との関係性は父子家庭になったからとかではなく、昔から大切にしてきたものであり、それを無くしては子ども達との関係性は築けないと思います。

ワーク・ライフ・バランス

退職にまで至らないにしても、家事・育児を優先しなければならぬあまり、早出・残業・出張ができず、配置転換、転職を余儀なくされる父子家庭は少なくありません。当然、夫婦揃っての共働き世帯でしたら、二人で生計を担い、家事分担が成り立っていれば二人で家事・育児をするところを、ひとり親はこれらのほとんどをひとりで行なわなければならない。

ひとり親世帯に限らず、どのような家族形態でも収入は必要ですが、ひとり親であっても、ある程度の収入は必要です。しかし、収入を確保するため家事・育児を疎かにすることはできません。

残業が当たり前のサラリーマンがシングル・ファーザーになったとたん、家事・育児を優先しながら仕事に就かなければならず、転職などにより収入は激減し、もしくは不安定な就労を余

儀なくされ、ワーク・ライフ・バランス（仕事と家庭の調和）は崩れてしまいます。

そうです、生活は崩壊し奈落の底に落ちるのです。そこに公的セーフティ・ネットは少ないのです。

しかし、そんな苦境でも当然生活していかなければなりません。シングル・ファーザーは家事スキルが自然と高まります。主婦の皆さんにも負けず劣らずの家事スキルが身につけていくのです。

私もシングル・ファーザーになった当初は、料理にてこずっていました。朝食の準備はまだしも、夕食の準備には苦労しました。仕事が遅くなり、夕食の準備に時間がかかれば子ども達の生活リズムは崩れます。

最初は料理を一品ずつ作っていましたが、時短や効率的な家事を目指すようになりました。煮物を作りながら隣りのガスレンジで炒め物、使ったボウルやピーラー、まな板などを洗いながら料理を遂行。料理が完成した時には、流しは洗い物が終わっているようになり、頭の中では、洗濯物のことやゴミ出し日のこと、子ども達のこと、仕事のことなどを考えながらの調理ができるようになりました。

男親だからといって、必ずしも家事が苦手ということはないと思います。



シングル・ファーザーになればむしろ
苦手などと言っていられない状況にな
ります。

このような家事スキルの上達によっ
て、仕事の行い方にも変化がみられる
ようになりました。ひとつの仕事に集
中しつても次の段取りや他の仕事を頭
の中で組み立てるなど、私の場合は家
事スキルの上達により、仕事のスキル

も向上したように思えます。つまり、
マルチ・タスクぶりが発揮されるので
す。

これが、私が提唱する究極のワーク・
ライフ・バランス（仕事と家庭の調
和）、仕事と家事の融合です。こうや
って、必死になってひとり親のみなき
んは日々頑張っているのだと思います。
しかし、このバランスは綱渡り状態
であることも事実で、公的セーフティ・
ネットも必要だと考えます。

日本の父子家庭の実態

ここで、日本のひとり親の状況を記
述したいと思います。

これまで、社会も父子家庭の存在に
関心を示してこなかったように思えま
す。「ひとり親」と聞けば、多くの人
は「母子家庭」を連想します。「父子
家庭」を連想する人は極めて少ないの
が現状です。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局
の平成一八年度全国母子世帯等調査
では「祖父母などと同居の母子世帯」
の数は約一五一万世帯、同じく父子
世帯数は約二〇万世帯。平成一七年
国勢調査の「親と子のみで生活するひ
とり親世帯」の数は、母子世帯の約
七五万世帯に対し、父子世帯は約九
万二〇〇〇世帯となっており、母子世
帯と比べても父子世帯は少なく、更に、

日本の総世帯数約四九五六万世帯と
比べると、約二〇万世帯の父子世帯
の割合は〇・四%でしかありません。
極めてマイノリティな存在なのです。

ひとりで家事・育児と仕事をこなす
という観点から言えば、母子家庭と
父子家庭の状況は大差がないと考えま
す。しかしながら、母子世帯と父子世
帯の支援格差、公的支援は母子世帯
に比べ父子世帯が少ないことや、平成
一八年度全国母子世帯等調査結果報
告が示す、ひとり親世帯の平均所得は
母子世帯が約二二三万円、父子世帯
が約四二二万円（全世帯平均五六三
万円）とあり、一見、父子世帯は所
得が高いことが支援の乏しさに起因し
ていると考えられます。

しかし、年収三〇〇万円未満の父
子世帯も全体の約三七%存在します。
その困窮する父子世帯に対する国や地
方自治体の父子家庭に対する支援制
度は依然少ないのです。

つまり、年収二〇〇万円の母子世
帯には児童扶養手当が支給されます
が、年収一〇〇万円の父子世帯には
手当は無かったのです。

パパと子どもの笑顔を守るため

このような現状を何とかしたいと私
は、二〇〇九年より、NPO法人全

国父子家庭支援連絡会（全父子連）の活動を行っています。

「パパと子ども達の笑顔を守りたい」と私達は、ひとり親世帯の支援として政策提言活動を行い、昨年八月には児童扶養手当法が改正され、父子家庭への支給が実現し、同年一二月には初めて手当が支給されました。

全国のシングル・ファザーから「今までクリスマスケーキやプレゼントを買うことが出来なかつたけれど、今年のクリスマスは手当が支給されたので買うことが出来ます」など電話やメールが寄せられます。

しかし、父子家庭支援は盤石になつたわけでもなく、今もさまざまな相談が寄せられます。

子育てに関しては、思春期に突入する女の子の対応、つまり生理や下着の対応の相談、園や小学校での保護者との交流ができない、つまりママさん達とコミュニケーションが取れず孤立している、という内容もあります。

その中でも多く寄せられる問題としては、家事・育児と仕事の両立が困難、会社を早退して子どもを病院に連れて行くことが理由なのカリストラ対象になつている、家事・育児を優先しなければならず所得が激減した…などの仕事と家事・育児のバランス崩壊、所得の激減による貧困問題が多く深刻です。

シングル・ファザーの連合軍である全父子連は、全て自費で活動しています。資金もなく、家事・育児と仕事に追われながらの活動です。

活動を続けて行くことは本当に大変ですが、何としても困窮する父子家庭の子ども達の生活を救いたいのです。「今の子ども達にどんな法律を残せて、どんな世の中を創り渡して行くか」が私達全父子連の、私達大人の役目です。

今後は就労支援、父子家庭に対する認知・理解浸透を図って行きたいと考えています。

シングルパパはスーパーイクメン!?

昨年末、二〇一〇年ユーキャン新語・流行語大賞が発表されましたが、「イクメン（育メン）」という言葉がトップ10入りしたことは記憶に新しいと思います。

イクメンとは、「育児を楽しむ男性、育児を積極的に行う男性のこと」とされていますが、私は、家事・育児を一手にこなす仕事も頑張るシングル・ファザーこそが「イクメン中のイクメン」だと思っていますし、そのようなお言葉を頂くこともあります。

政府も肝入りで「イクメン・プロジェクト」を立ち上げ、厚生労働省のホ

ームページにそれはあります。

旧来の日本の労働環境は、残業依存体質、減私奉公が良しとされてきました。しかし、それを払拭しなければなりません。

母親とともに、父親も家庭や地域コミュニティに必要不可欠で、子育てに重要な存在です。男女共同参画社会基本法が制定されて一〇年が過ぎ、平成一九年には仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章が策定されました。

私も、父子家庭の立場から「父親の子育て」や「パートナーシップ」「ワーク・ライフ・バランス」などの講演活動や執筆活動を行い、父子家庭支援や男女共同参画社会の実現、父親の子育て支援を行っています。全父子連のミッションである父子家庭支援の究極は、全ての父親が「夕方、明るいうちに家に帰る」ような社会の実現とも言えます。家族そろって朝食や夕食を食べることが大切だと感じます。子どもは親を選べない、と言いますが、子どもは社会を選べないのです。子ども達の笑顔を守り、誰もが安心して子育てができる社会の実現を目指すことは、私達大人のメイン・プロジェクトなのです。